

# 安寧



昨年完成した東屋(撮影:松村信彦氏)

ホームページアドレス <http://www.himeji-gokoku.jp/>

兵庫縣姫路護國神社報  
 「安寧」第二十二号  
 発行所 兵庫縣姫路護國神社  
 〒六七〇〇三姫路市本町一八  
 電話〇七九一三四一〇八九六  
 安寧(あんねい):世の中が穏やかで平和なと

## 英霊の言乃葉

### 遺書

陸軍伍長 森

昭和二十年三月二十九日  
モルッカ諸島モロタイ島にて戦死  
兵庫縣飾磨郡家島町出身 二十九歳

浅吉命

その後も達者で暮らしてゐる事と思ふ。

俺も相変はらず元気だ。安心してくれ。

和子、本当にお前に苦勞かけてすまん。俺は感謝してゐる。

弘子も大きくなつてゐるだらうね。

どうか弘子を強く元氣に育ててやってくれ。俺は安心して行く。

(中略)

何時かの、あのお祭の夜の思ひ出が、俺の頭の中に深く残つてゐる。

お前もさつと何か想ひ出してゐるだらう。

いやいや今は、こんな馬鹿な事を考へてゐる時ではない。現在の俺は一命を國家に捧げた身だ。

お前も元氣で、銃後の妻として立派に働いてくれ。

俺は笑つて南海の地に行く。

お父様やお母様に宜しく。お叔母様にも宜しく頼む。俺の事は少しも心配するな。

遠き南海の空から、皆様の健康と幸福を祈つてゐるだらう。

森 浅吉

和子殿

(靖國神社社務所)  
平成三十一年三月 社頭掲示



# 天皇陛下御即位奉祝奉告祭 並びに令和元年度春季大祭齋行

(五月二日午前十時三十分)

五月一日踐祚改元 新帝陛下が即位された。その翌日が護國神社大祭の日程にあたり、ご英霊にその旨を御奉告申し上げ参列者全員で新しい御代の弥栄をお祈り申し上げた。快晴に恵まれた緑豊かな境内で祭典が斎行され約六百名が参列した。

ご遺族、崇敬奉賛会員をはじめ、国会議員、県会議員、市会議員、町長、町議会議員、陸上自衛隊、兵庫県神社庁からは三木副庁長が参列した。受付は早朝から姫路郷友会、隊友会の方々が奉仕された。

定刻通り号鼓、齋館玄関から宮司以下祭員、三木英一大祭委員長(神社総代会会長)、釜谷研三崇敬奉賛会副会長、兵庫県神社庁三木通副副庁長、兵庫県遺族会柿原啓志会長以下特別参列者が、関西雅楽松風会による雅楽の奏でられる中、本殿に向かって参進した。本殿に拝礼後、姫路市民合唱団先導により、国歌斉唱され、修祓に続いて海川山野の神饌が供えられ、また、淡交会西播磨支部幹事長をはじめ、支部有志により心を込めて点でられた抹茶とお菓子が神職の手によって外陣内に供えられた。静寂の中、泉和慶宮司が英霊感謝と令和時代の安泰の祝詞を奏上した。祭文は、大祭委員長、



献茶



詩舞「護國の英霊に捧ぐ」



宮司挨拶



大祭委員長挨拶



「護國の桜」独唱

えました。そして昨日新帝陛下が御即位になり元号が令和となりました。本日は昨日の踐祚改元奉告祭に次いで天皇陛下御即位奉祝奉告祭並びに令和元年度春季例大祭を斎行致しました。上皇陛下は常に戦火に倒れ戦陣に散った御霊にお心をお寄せでありました。戦後は

崇敬奉賛会長、兵庫県遺族会会長が奏上、神賑行事の福田賀徳陽、北村鯉杏、富士原浩山各氏により、詩舞「護國の英霊に捧ぐ」、続いて姫路市民合唱団の「歌声の響き」「故郷」の歌が神前で合唱された。最初の歌は上皇皇后陛下下作詞作曲の御歌である。又今回は特別に神職でもある歌手涼恵氏に歌「護國の桜」を奉納いただいた。そののち順次玉串を奉奠し、御霊の平安を祈った。宮司は祭典終了後「御皇室の諸儀式を垣間見ますと日本の長い歴史の中で私たちはつながつているとそのことを実感として感じられた方々も多いと存じます。四月三十日天皇様はまず皇祖天照大神をはじめ神々にご譲位を奉告なさいました。そして国民に向けてお言葉を述べられ安倍首相は代表して感謝の言葉を述べました。この護國神社にも平成最後の感謝を込めて神殿にお参りし御朱印を求める人が五〇〇人を超

## 崇敬奉賛会 安泰祈願祭並びに総会開催

十年ごとに全国五十二の護國神社宮司を宮中にお呼びになり幣帛料をお供えになり、また兵庫県内に行幸啓なさいますと必ず護國神社に幣饌料を賜りました。本日はご譲位と新帝陛下の御即位を神前に謹んで感謝をこめてご奉告申し上げ令和の時代が国家国民にとって安寧であることをお祈り申し上げました」と挨拶した。祭典ののちは来賓役員百名余で、直会が会館二か所で行われた。また、境内南テントでは霊友会の方々のコーヒーなどの接待があった。

四月十五日、兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会、安泰祈願祭並びに会員総会が開催された。本殿において、安泰祈願祭を行われ、三宅会長を始め、役員が共に拝礼、会長が代表して玉串を奉奠された。その後、会場を参集殿に移し、深田真史運営委員の司会によって総会が開催された。国歌斉唱に続き、崇敬奉賛会副会長迎山氏による開会宣言が行われ、会則に従い、三宅会長が議長に選任され、議事に入った。三十年度の事業及び会計報告が三木運営委員長から、そして監査報告を岡本監事によって報告され、全会一致で承認された。また記念事業の平成三十年度決算についても宮司より説明、岡本監事が監査報告をされ承認された。引き続き、三十一年度事業計画及び予算案が審議、可決された。次に総代会会長に三木英一運営委員長が就任されたため奉賛会副会長への就任も承認された。以上本年の議事も滞りなく執り行われた。休憩をはさみ、司会を阿比野運営委員に代り、直会が開かれた。釜谷常任理事の発声による乾杯の後、賑やかに会は進み、それぞれが抱負を述べたり、また、崇敬奉賛会の団結と活性化を誓い、最後は、三枝常任理事の閉会の言葉を持って盛況の内に会を終えた。

## 第九回 戦士の証言

## 「女子挺身隊の実情」

講師 新田和子氏



元女子挺身隊員の新田和子氏

令和元年六月九日、兵庫縣姫路護國神社参集殿において、元女子挺身隊員の新田和子氏をお招きして、「女子挺身隊の実情」と題し、第九回戦士の証言が開催された。新田氏は昭和二年（一九二七年）に熊本市に生まれ、陸軍大佐でいらっしやったお父様の異動で宮崎県、朝鮮半島、千葉県、宮城県、

東京府（当時）などで過ごされた。

女子挺身隊とは大東亜戦争が激化した始めた昭和十八年（一九四三年）二月頃から徴兵による国内

の人材不足、労働力不足を補うため、十四歳から二十五歳未満の未婚女子を勤労挺身隊として、志願制で動員を決定したことに始まり、軍需工場等での勤労奉仕を主として、以後、年齢、職種を拡大し、終戦に至るまで女性も銃後で戦いを支えた制度である。中には血書まで書いて挺身隊に志願した女学生もいたほどだった。講師の新田氏も、宮城県第一高等女学校を卒業後に、女子挺身隊員として仙台城下にあった東北軍管区司令部作戦室で情報通信要員として勤務された。東北軍管区司令部勤務は挺身隊員の憧れで競争率が高かったそうだ。新田氏は、当時の作戦室の雰囲気や各地の戦線の情報が集まり、各地戦線の地図の上に軍艦や飛行機の模型が置かれ、それを基に作戦を立てていた、大変立派な設備だったと当時の作戦室の様子を思い返された。女性でも昼夜問わずに働き、夜中の二時に兵隊さんと一緒に情報取りをしたものだと当時を振り返られ、戦況が厳しくなるに連れて、司令部内の体制にも無理が出てきて、一時期、自分も体調を崩したことを語られた。

また、戦中、戦後の混乱にも触れ、自分の父親もいつどこで戦死したのかはつきりせず、「通信途絶の日を以て戦死とす。」と言われたその日が父の命日となり、自分としてはとても納得がいかなかった。戦後は家族を支えるために、日本パルプ工業（現・王子製紙）に就職し、定年まで勤め、

忙しい毎日を送ってきた。しかしせめて、自分の父親がどうなったのかを調べてやろうと思ひ、時間を見て様々な資料を集め、色々な書物にあたって戦史の研究を始めたと言われた。

戦後の我が国の体制についても語られ、戦前には立派な軍人がたくさんおられたのに、GHQの占領政策に乗せられて、軍人を全て戦犯として扱ったため、功績に蓋がされてしまっていると憤慨され、中でも、たつの出身の田中静夫大将について触れられ、田中大将は祖父の上司でもあった人で、宮城事件（終戦前日に一部の陸軍省勤務の将校と近衛師団参謀が中心となって起こしたクーデター未遂事件）を鎮圧後、敗戦の責任をとって自決されたが様々な功績を立てられた素晴らしい軍人であった。しかし、今、田中静夫大将について知る人はほんのわずかで、残念だと戦争に係ることは全て悪としてしまう今の風潮に苦言を呈された。



講演の様子

講演途中から、質疑応答が始まり、会場の方々のやりとりを通して、ご英霊に対する思いを語って下さり、是非ともお時間のある方には遺骨収集事業に参加していただくたい、特に若い世代の方に！と熱く語られたの時間を超えての講演となった。

（文責）崇敬奉賛会運営委員 戸井田真太郎

# 英霊感謝祭・ 英霊顕彰の集い

(令和元年八月十五日)

終戦から七十四年を迎える当日大型台風10号が、姫路にも接近しJRが運休などしたため、公共の交通機関が混乱した終戦の日であった。

荒天が予測される中、十時より英霊感謝祭を拝殿内にて、当社の泉宮司により祭典が挙行された。祝詞奏上後、当社巫女による、「みたまなごめの舞」が奉納された。その後、参拝者約七十名(内、子供約十名)を代表して、遺族会代表及び崇敬奉賛会副会長の三木英一氏が玉串奉奠を行い、参拝者全員でご先祖と自然に感謝するとともに英霊への感謝と尊崇の念を捧げた。

終了後、本殿より参集殿二階安寧の間に移動し、正午まで英霊顕彰の集いを行う。参加者は、六十数名であった。

十時三十五分より、国歌斉唱、三木英一氏より開会の挨拶を行った。天候不順により行事内容の変更等の説明連絡を行った。

十時五十七分より、電子紙芝居①「神様と神棚と」のお話を播州白山神社(多可町)禰宜の小畑加苗氏が行った。スライドを使いわかりやすい解説とともに日本古来の神様や神棚参拝の意味などをあらためて知ることとなった。

十一時十分より、電子紙芝居②実話「戦場に青春を捧げた乙女たち」の語り三村恵氏、ピアノ尼子美保氏により、漫画家畠奈津子氏「白衣の天使」の原画をもとにしたスライド映像とともに行った。今回は、初公演となる作品でもあるため、主催者のもとより参加者の興味を大きくひく雰囲気の中で始まった。素晴らしい語り、会場内は水を打ったような静けさの中で聞き入り、さらに涙をこらえる姿も数多く



陸上自衛隊姫路駐屯地ラッパ隊

見受けられた。命を捧げた従軍看護婦たちの追悼は、現在、青葉園(さいたま市)にて慰霊され、地藏尊が建立されている。終わりに、「愛国の花」を高見裕子氏が歌唱し、締めくくった。また、畠氏のご協力により原画の展示も行った。漫画は冊子にして、参加者に無償配布された。

十一時五十分より、雨のためそのまま参集殿にて、全国戦没者追悼式を行った。ラジオ放送に合わせ、国歌斉唱、安倍晋三内閣総理大臣式辞、黙祷とともに陸上自衛隊姫路駐屯地ラッパ隊七名による、「国の鎮め」の奉納演奏が行われた。その後、新帝陛下のお言葉を拝聴。参列者一同心静め、先の大戦で尊い命をなくされた戦没者の方々へ追悼の意を表した。

十二時八分より、参集殿において陸上自衛隊ラッパ隊三名による演奏が行われた。自衛隊内での生活の様子を解説していただきながら、隊内でのラッパの重要性を知ることとなった。演奏内容は、「起床のラッパ」「食事のラッパ」「国歌のラッパ」の三曲であった。

十二時二十三分より、沖縄音楽隊エイミーズ七名により沖縄民謡の演奏が行われた。曲目は、「安里屋ユンタ」、「十九の春(田端義男)」、「ていんさぐぬ花」、「屋嘉節」、「歌声の響(上皇、上皇后両陛下の作詞作曲)」そして沖縄民謡最後となる「だんじゅかりゆし」の時は、会場内全員で手踊りに参加し、会場が一体となった。この手踊りには、「かき回し」という意味があり、テ



沖縄音楽隊エイミーズ

ンボの速い沖縄民謡の演奏に合わせて踊られることが常であるそう。沖縄の方言で歌う趣きのある歌声にひたれる時間となった。最後には、バイオリン前川美加氏、ピアノも加わり「ふるさと」を全員で合唱して締めくくった。ちなみに、エイミーズは、当社より近隣にて活

動されている三線教室のメンバーである。令和最初の八月十五日を迎え、英霊顕彰の集いは台風の影響で、内容が大幅に変更し午前中に行事を行った。

十三時、崇敬奉賛会運営委員の尼子尚公氏より開会の挨拶を行った。今年の英霊感謝祭及び英霊顕彰の集いが締めくくられた。

先人たちはいかなる思いで戦い、何を守ろうとしたのか。そして、先人の思いを継ぐ私たちは、どのようにいまを生き、そして次の世代へ何を伝えたいのか。参加者は、感謝と尊崇の念をかみしめ、使命を新たに心に定め次世代へ繋いでいくと。そのためにも、歴史の授業でも出てこない真の歴史を学び、正しい国内外の歴史を次世代へ伝えていくことは、この時代を生きる私たちの使命ではないだろうか。

午後の部に予定されていた、「英霊の言乃葉」、「語られない沖縄戦第二章」、「二人語りー女学生と米兵が見た沖縄戦ー」は、来年度への持ち越しとなった。

(文責) 崇敬奉賛会運営委員 尼子尚公

# 「紫電改」と姫路

六月九日、加西市の鶉野飛行場（姫路海軍航空隊・川西航空機姫路製作所鶉野工場跡）にて、大東亜戦争中につくられた局地戦闘機「紫電改」の実物大模型が公開され、二千人超が訪れた。鶉野飛行場は、昭和十八年十月、パイロット養成のために「姫路海軍航空隊」が設置されたことに始まり、昭和十九年、川西航空機姫路製作所鶉野工場がつくられ、局地戦闘機「紫電」「紫電改」の組立がおこなわれていた。当時つくられた滑走路（長さ千二百メートル、コンクリート製）をはじめ、防空壕や機銃座など多くの戦争遺跡が現存している。



実物大模型「紫電改」

このたび、加西市は国が推し進める地方創生事業の一環として、当時この地で組み立てられた「紫電改」の実物大模型を二年がかりで制作した。この制作にあたり、長年、鶉野飛行場の調査研究を続けてこられた上谷昭夫氏（戦史研究者、高砂市在住）の功績によるものであることを付け加えておきたい。

「紫電改」をつくった川西航空機は、昭和三年に神戸市で設立された兵庫県の飛行機会社である。昭和五年には西宮市（当時は武庫郡鳴尾村）の新工場開設と同時に本社を同地に移し、海軍の「二式飛行艇」や水上戦闘機「強風」などを生産する水上機メーカーであったが、「強風」を改良し、陸上戦闘機となる「紫電」「紫電改」を生産することになった。これらの設計に携わったのは、姫路市出身で川西航空機の菊原静男技師であった。戦後、川西航空機は新明和工業として再出発し、現在は海上自衛隊の救難飛行艇「US-2」を生産している。

姫路では、昭和十六年十二月、播但線京口駅東側にあった日本毛織姫路工場の転用が決まり、昭和十八年十二月から川西航空機姫路製作所として「紫電」の生産が始まった。しかし、姫路には飛行場がなかったため、加西市（当時は加西郡九会村・下里村）の飛行場に隣接した組立工場を建設した。姫路製作所で行われた機体を一旦ばらし、馬車で加西まで運び、組立や装備の取付、試験飛行の後、海軍に納品されていた。なお、姫路製作所では、「紫電」四百六十六機、「紫電改」四十六機が組み立てられたという。

昭和二十年六月二十二日、アメリカ軍のB29の爆撃（姫路空襲）により、姫路製作所は壊滅的打撃を受けた。このとき、工員や周辺住民など三百四十一名が死亡した。うち、姫路製作所に海軍の軍属として徴用されていた播磨・但馬出身者四十三柱を姫路護國神社でお祀りしている。

「紫電改」は、昭和二十年三月十九日、松山上空で第三四三海軍航空隊の「紫電改」が米軍のグラマンを迎え撃ち、戦果をあげた話が有名である。また、八月六日朝、「紫電改」で長崎県大村へ向かう途中、



同航空隊の本田稔少尉が広島上空でアメリカの原爆投下に遭遇したという証言もある。

終戦から七十四年が過ぎた。新たな時代によりみがかえた「紫電改」を通して、当時の史実をきちんと伝えていくことは重要だ。一方、「紫電改」の生産に関わった人や実際に乗って戦った人をはじめ、戦争体験をじかに聞くことが困難な時期に来ていることも私たちは改めて認識すべきだろう。

【紫電改】実物大模型の公開について

【公開日時】毎月第一・第三日曜日

十時～十五時

【公開場所】鶉野飛行場滑走路跡

（加西市鶉野町二一九三）

鶉野飛行場資料館を目印にお越しください

## シリーズ 英霊の戦場(十三)

連合艦隊が圧勝した第一次ソロモン海戦  
幸運と海軍魂の成果だったが：

はじめに

戦場シリーズの解説目的は大東亜（太平洋）戦争について「よく知らない」若い方々に我が将兵が祖国防衛とアジアの植民地解放の為、何処でどの様な戦闘で戦死され、結果、今日の平和の礎を築かれたご英霊を忘れないで頂きたいとの戦場概要シリーズです。

## ソロモン諸島と戦場となった海域

海戦と陸戦の根本的な違いは一戦闘で致命的な打撃を与えるか受けるかである。戦艦等が撃沈や大破された場合の復元力は乗艦将兵と共に長い時間を要する。従って艦隊指揮官の決断は敵情不明の場合には「慎重」とならざるを得ない。第一次ソロモン海戦も勝ち戦であったにもかかわらず戦後連合軍側の状況が判明してから「悔やまれる海戦」の一つとなった。ソロモン諸島（地図1参照）戦場海域（地図2）

## 海戦の経緯

ミッドウエーで大打撃を受けた日本海軍は情報戦の成果もあつて、連合軍側では依然大きな脅威であった。従ってガダルカナル島の飛行基地は米豪分断作戦を企図する日本軍の出鼻を挫かなければとの強い決意でガ島・ツラギに進攻を開始した。

## 米豪軍の作戦

米軍の戦力は欧州ドイツ打倒を優先して、日本軍に対しては攻勢戦力増強まで戦略守勢を基本としていた。然し、ラバウルを日本軍が占領してから攻勢

作戦を立案して一部は南太平洋に基地等を建設していた。ミッドウエーで勝利してから「守勢から攻勢に転ずるべきである」とのマッカーサー大将の強い要請でソロモン諸島への作戦が開始された。然し米軍側でも海軍艦艇や海兵隊等で実行する作戦は海軍が指揮権を持つべきとの指揮権問題が生じて紛糾していたが、最終的に太平洋方面部隊指揮官ニミッツ海軍大将が任命された。但し、米海軍側も十分な空母を含む艦艇・輸送船・海兵隊等の兵力を保持しないまま作戦を遂行しなければならなかった。ガ島・ツラギ遠征部隊は八月六日午後六時、不連続線スコールのお蔭で隠密裏にガ島南方約一〇〇キロに接近、翌七日午前一時ガ島とツラギに向かう船団が分離、両島上陸地に対して午前四時艦砲射撃開始、午前七時に上陸を開始した。

## 日本艦隊の作戦

ツラギからの「敵猛爆中」から次々と入電する緊急電報を受け取ったラバウルの第八艦隊（ソロモン海戦の主役・司令長官三川軍一中将）司令部では予期しない出来事であったため、強行偵察（相手の出方を探る戦闘行動）であろうと判断して直ちにソロモン諸島方面に出撃する命令を発した。ラバウルの第五空襲部隊（指揮官：山田定義少将）は直ちに陸攻三機で偵察を実施、ガ島に向かった一機がツラギとガ島の米豪海軍艦艇の偵察に成功、この時「敵の飛行機発見出来ず」の報に接した空襲部隊指揮官は「敵空母が必ず居る」と判断して陸攻二七機と零戦一七機を七時五十五分発進させたが空母を発見できずツラギ沖の輸送船団を攻撃した。（写真①）

然し、日本機の行動はレーダーで捕捉され、密雲と敵機の妨害で戦果は少なかった。零戦と優秀な搭乗員の活躍は目覚ましく敵戦闘機四八機撃墜の戦果（米軍側：十一撃墜・被弾着艦約二〇機、但し米側も日本機の撃墜戦果を過大視）を挙げた。翌八日、索敵機も敵空母を発見できなかった（但し、ガ島南西のハンター岬で見張り員が発見していたが通信途絶

の不運で情報は伝達出来なかった。）陸攻機二三機と零戦一五機はツラギ沖艦船を目標に超低空で突入したが敵の防衛砲火で次々と撃墜された。（写真①）その内の一機が被弾しながら輸送船に突入し、同船は夜まで燃え続けソロモン海戦時の好目印となった。

## 海戦の経緯

当初、三川司令官（旗艦：鳥海）は練度の高い第六艦隊（重巡：青葉・加古・衣笠・古鷹）のみ出動させる予定であったが、艦齢が古く練度も不十分とされた第十八艦隊（軽巡：天竜・夕張、駆逐艦：夕風）指揮官の強い要請で同行させ計八隻で出撃、軍令部は予想敵艦三十隻の中に三隻の空母が居ることを想定しており夜襲による奇襲作戦は危険が大きいと渋った。然し、この危急事態に対応できるのは第八艦隊だけと判断して作戦遂行を認可した。

七日午後二時三十分出港、八日午前四時索敵機発進、八時二十分敵偵察機が艦隊上空を約一時間接触、北方に転進の偽行動（米豪軍はこの行動から日本軍はサンタ・イサベル島の水上基地建設隊と判断、この判断が先入観となり海戦敗因の素となった。）により攪乱。偵察報告から敵空母はガ島周辺約四五〇キロ圏内に居ないと判断し、ガ島泊地突入を決意。

## 決定した戦闘要領（主要部のみ抜粋）

一 サボ島南から突入、ルンガ沖の主敵を雷撃、左に転じてツラギ前方の敵を砲雷撃、サボ島北方から避退。

二 突入は一航過とし、速やかに敵空母から離脱する。午後四時半 航空機・内火艇・魚雷用燃料、爆雷等可燃物の水中投機、弾薬庫漲水弁開放等敵弾による火災防止措置終了後、戦闘態勢に移行。

九時 水上偵察機三機が照明隊として射出  
十時四十分 戦闘用意が発令

（以下の記述は時間を省略、地図2を参照）

鳥海が①駆逐艦（南方哨戒艦）を発見、レーダー装備の米軍側は操作員の過労と陸地エコー（雑音）で

日本艦隊を発見出来る。

鳥海が米・豪重巡二隻と米駆逐艦二隻に魚雷発射したが命中せず。(米豪軍南方部隊)

照明隊が敵艦を浮き彫りにする上空に吊光弾投下。青葉・加古・衣笠が米巡三隻②③④に砲雷撃、六本の命中を確認。

同時に第六戦隊の殿艦古鷹が米駆逐艦④を雷撃撃沈したが、火災を発生して続行していた米巡③が隊列に突入態勢と見た同艦艦長は危険を回避する為左に転舵しつつ魚雷を発射三本の命中を確認。

天竜は照明弾を打ち上げて反撃して来た米駆逐艦④を照射砲撃で撃沈(戦果は夜間一航過の為推定)夕張は米巡③に魚雷を発射、一本命中火災発生、反撃態勢の駆逐艦⑤を砲撃し命中を確認。

夕風は転舵中、羅針盤の故障で艦隊の混乱を避ける為反転した。その結果、米軽巡⑥と遭遇し雷撃撃沈、米駆逐艦⑤を砲撃大破。

北東に転舵した鳥海は左前方に重巡三隻⑦⑧⑨発見、照射砲撃を開始、西側の古鷹・天龍・夕張も砲雷撃開始(米艦にとっては東西から挟撃された)夕張が米駆逐艦⑩(北方哨戒艦)を発見、砲撃。零時二十分 三川司令官が「全軍引揚」を下命。

第八艦隊の勝因

夜襲(奇襲)、単縦陣、一航過、不測時各艦長判断

引揚中巡洋艦「加古」撃沈の不運

米潜の魚雷航跡を発見したが近距離(六五〇m)の回避出来ず。三発命中。六七名が艦と運命を共に。

助かった米輸送船団

一挙に主戦力の水上艦艇を失い、空母部隊不在の米豪軍は日本海軍が反転攻撃しなかつた事に安堵。

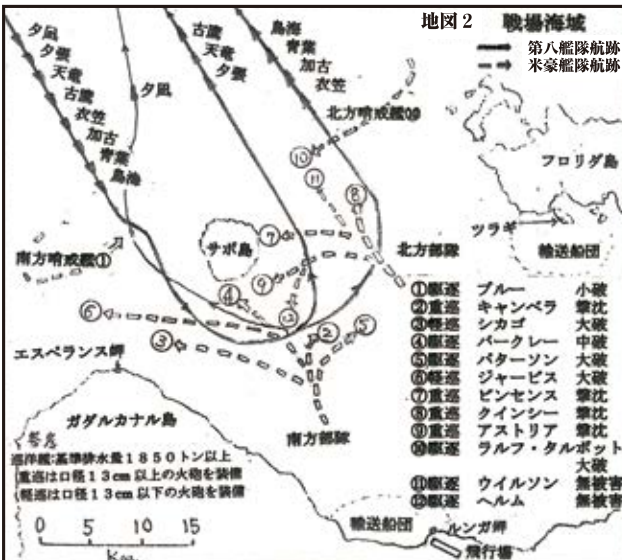
米豪軍側の配備と損害

七日と八日の日本軍による空襲で損害は軽微であったが物資の揚陸が進捗せず、上陸部隊は物資不足の危

機状況であった。輸送船団は更に二日間停泊しなければならなかった。又、空母部隊は戦闘機四〇機以上を失い、然も燃料欠乏に陥り日本海軍の航空戦力が優勢と判断して引揚が承認された。ガ島とツラギ港外の船団を日本海軍水上艦隊及び潜水艦から守る為、警戒艦をガ島とサボ島(南方部隊)及び同島とフロリダ島間(北方部隊)並びにフロリダ島とガ島の東方水路(東方部隊)の三か所に配備した。

艦艇 撃沈：重巡四隻

大中破：重巡一隻・駆逐艦二隻



人員 米軍 戦死 一〇二三名 戦傷 七〇九名

豪軍 戦死 約一五〇名 戦傷 不明

日本軍の損害

艦艇 撃沈：無し、但し引き揚げ中重巡(加古)一隻

小破：重巡(鳥海・青葉・衣笠) 三隻

人員 戦死一〇三名(重巡：加古六八名を含む) 但し第五空襲部隊の戦死(詳細不明)含まず。

姫路護國神社に祀れている(英霊 (第五空襲部隊一七柱・加古四柱含む) 二四柱尚、ご英霊の多くはソロモン諸島の海底に眠って居られます。

参考文献 防衛省戦史叢書「南東方面海軍作戦」

(文責 崇敬奉賛会理事 曾田孝一郎)

奉祝

令和

ごたいれい

# 御大札

「御大札」とは、天皇の即位に係る一連の儀式の総称です。秋には、即位礼や大嘗祭をはじめとする数多くの儀式が行われます。平和で豊かな我が国を願い、「御大札」を国民の皆様とともにお祝いしましょう。

## 即位礼

即位を天照大御神に御奉告  
国内外に即位を宣言

十月二十二日(火)

皇位につかれた天照陛下が高御座に登られ、国民、諸外国に対しその即位を高らかに宣明(宣言して明らかにすること)し、国民や諸外国の代表がそれを奏ぐ儀式です。当日は宮中の賢所に即位の旨を御奉告されます。



## 大嘗

天皇陛下とともに  
即位を祝う大嘗祭の直会

大嘗祭で捧げられた神饌のおさがりを、天皇陛下と大嘗祭に参列した国民の代表と一緒に戴き、その絆は一層堅いものとなります。

## 親謁

伊勢の神宮に  
即位を御奉告

天皇陛下は、天照大御神を祀る伊勢の神宮や神武天皇、近縁の天皇の御陵に参拝され、御大札を無事に終えられたことを御奉告されます。

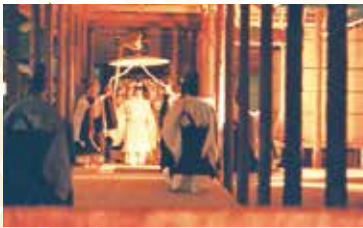


## 大嘗祭

即位後初めての  
新嘗祭  
御一代に一度の重儀

十一月十四日(木)・十五日(金)

天皇陛下は毎年秋に新穀を天照大御神をはじめ、神々に御自らお供えする新嘗祭を行います。大嘗祭は古代の工法そのままの簡素に建てられた大嘗宮で行われ、国家・国民の安寧と五穀豊穡を祈念されます。また、全国の各都道府県から特産の農水産物もお供えされます。



御代替り・御大札について、より詳しく知りたい方は、お手持ちのスマホで左のQRコードを読み込んでください。  
<https://www.jinjahoncho.or.jp/miyogawari>

### 巫女さん募集のお知らせ

誠実で明るい方お待ちしております

#### 【募集資格】

- 十六歳～二十五歳 未婚の女性
- ※高校生の方は学校と保護者の許可が必要ですが
- ※男性も若干名募集しております
- ※頭髪の染色不可

年末一日間以上、一月一・二・三日に奉仕頂ける方  
たくさん奉仕頂ける方を優先し採用致します。

#### 【奉仕期間】

〈七五三〉十一月中の土・日・祝日

〈年末〉十二月二十五日～二十八日  
午前九時～午後五時

〈大晦日〉十二月三十一日  
午後十一時～午前十時 ※二十歳以上

〈年始〉一月一日～一月十日  
午前八時～午後八時 ※うち八時間交代制

#### 【奉仕内容】

〈七五三〉ご祈祷受付・奉仕

〈年末・年始〉清掃、迎春準備、お守り、おみくじ授与

#### 【申込み方法】

メールにて名前・住所・電話番号・年齢・通話可能な時間帯(午後五時まで)を明記の上、左記メールアドレスまでお送りください。こちらからご連絡致します。

[bokoku.miko@gmail.com](mailto:bokoku.miko@gmail.com)

#### 【申込み締切】

十二月上旬まで随時募集

※定員に達し次第終了

